HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本における産業遺産の観光資源化プロセス ： 地域社会における「空間の記憶」と「価値の消費」の次元から［全文の要約］
Author(s)	平井, 健文
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第13631号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74402
Type	doctoral thesis
File Information	Takefumi_Hirai_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

日本における産業遺産の観光資源化プロセス

―地域社会における「空間の記憶」と「価値の消費」の次元から―

2018 年度

（平成 30 年度）

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院

博士学位論文

【要約】

平井　健文

1　章立て

序章　文化遺産の何が問われているのか

0.1　本研究の問題意

0.2　本研究の目的

0.3　本研究の対象と方法

0.4　既往研究の再検討と本研究のアプローチ

0.5　本論文の構成

第 1 章　「空間の記憶」とその形成プロセスにおける「価値の消費」 ――本研究の理論的視座

1.1　観光資源化プロセス――「アリーナ」における主体の相互作用

1.2　「空間の記憶」の形成プロセス――文化遺産の価値の生産と消費

1.3　小括――記憶の想起と意味の生成・解釈の循環的な関係

第 2 章　いかにして産業遺産は観光資源となったのか
――日本における産業遺産の観光資源化についての通時的考察

2.1　日本における産業遺産保存の契機とその展開

2.2　産業遺産の観光資源化の方法とその変容

2.3　「産業と文化の相克」と経済的価値の重視――1980 年代までの産業遺産の社会的文脈

2.4　産業遺産の文化的価値の構築とその社会的文脈

2.5　小括――文化遺産としての観光資源化を成立させた社会的文脈とその方法論

第 3 章　地域社会における「空間の記憶」の形成プロセス

3.1　内発的な「空間の記憶」の形成――住友赤平炭鉱跡

3.2　地域社会の構造的変化と「空間の記憶」の形成――生野鉱山跡を中心とする産業遺産群

3.3　小括――「空間の記憶」の形成プロセスの差異

第 4 章　「空間の記憶」の形成の帰結と「価値の消費」との相互作用

4.1　産業遺産の観光資源化をめぐるコンフリクト――住友赤平炭鉱跡の場合

4.2　「価値の消費」がもたらす多様な「空間の記憶」の保証
――生野鉱山跡を中心とする産業遺産群の場合

4.3　小括――「空間の記憶」の形成の帰結と社会的排除という課題

第 5 章　多様な主体を包摂する観光資源化のあり方

5.1　生野ルートダルジャン芸術祭と旧生野鉱業所購買会

5.2　空間／場所の象徴性としての「生活」

5.3　観光とアートによる「われわれの空間」の開放と観光者とのコンタクト

5.4　住友赤平炭鉱跡の「坑口浴場」の保存とその意味

5.5　小括――多様な主体を包摂する観光資源化のあり方

終章　本研究の成果と課題

第 1 節　本研究のまとめ

第 2 節　本研究の成果と課題

2　本稿の概要

本稿は，日本における産業遺産の観光資源化プロセスを明らかにするとともに，それに伴い地域社会に中に生じる社会的排除／包摂の様態を示すことを目的とした．今日においてはグローバル化の進展により，地域社会は，地域間競争と絶えざる「資源化」の圧力の下にある．本稿ではこれを与件として，既往研究が捨象してきた地域社会内部の多様性に焦点を当てた上で，産業の遺構に文化遺産としての価値が構築され，またそれが消費されるプロセスを描出した．そして，その中に生じる地域社会内部の力学を明らかにするとともに，具体的な社会的排除の様態を示しつつも，広範な主体の包摂を促す実践について，事例を基に考察した．

3　各章の要約

序章では，本稿の問題設定や研究方法を説明した上で，既往研究の再検討を行った．

近年の日本においては，文化遺産への注目が高まる一方，グローバル化に伴う空間の「資源化」が進展している．その中で，地域社会において商品としての訴求力を持ちうる要素のみが，既存の生活環境から切り離される形で資源化プロセスに取り込まれていくという，巧妙化した社会的排除の様態が確認できる．そこには，既往研究が一元的に捉えてきた「ローカル」な場における人々のせめぎ合いや葛藤が存在するはずであり，その問題に迫るためには経済的領域には還元しきれない「文化的性格」，つまり象徴と意味の持つ作用に焦点を当てる必要がある．このような視座から，地域社会における文化遺産と観光の関係性を考察した研究は少なく，本稿では，産業遺産の文化的「価値」の生産と消費のプロセスに焦点を当て，この様態を捉えることとした．そこで，文化遺産としての価値構築プロセスを明瞭に示し，かつ観光との親和性の高い対象として，産業遺産，特に炭鉱・鉱山の遺構を研究対象として定めた．

その上で，以下の 3 つの具体的な検討課題を設定した．第 1 に，産業遺産の観光資源化についての時系列的な整理であり，これは事例研究を行う上での予備考察として位置づけられるものである．第 2 に，産業遺産の価値構築プロセスにおける地域社会の力学の解明であり，これは「文化」や「過去」をめぐる言説の構築プロセスを，地域社会に固有の文脈の中に位置づけて考察するものである．第 3 に，産業遺産を「観光」資源として活用することで生じる特有の力学の解明である．これは，観光者という重要な他者とのコンタクトや，観光が持つ文化的，経済的なインパクトはどのようにして地域社会の主体に理解されるのかを明らかにするものである．以上の 3 つの考察の結果として得られる知見を総合することで，本稿の設定した問いに答えることとした．また，こうした一連の考察を経ることで，先述したような社会的排除の様態についての知見も得られるであろう．それは一方で，社会的包摂の契機を探求する試みとならねばならない．

研究方法については，まず国内 8 ヶ所の，炭鉱・鉱山に関わる産業遺産の悉皆調査を実施し，比較研究を行うこととした．これは，第 1 の検討課題に対応させたものである．続いて，その中から 2 つの事例（北海道の住友赤平炭鉱跡と兵庫県の生野鉱山を中心とする産業遺産群）を抽出して，半構造化インタビュー調査と資料調査，参与観察に基づき，地域社会における産業遺産の観光資源化プロセスを考察することとした．これは，上述した第 2，第 3 の検討課題に対応している．

また，文化遺産研究（Heritage Studies），文化社会学，環境社会学の各領域における既往研究の再検討を通して，文化遺産の動性や権力性，また地域社会における主体の多様性といった重要な論点を確認した．一方で，文化遺産の資源化の現場における観光の多面的な作用を捉える必要性があること，そのために観光者のパフォーマンスに着目しつつ，意味と象徴のシステムとしての「価値」が，どのようなアリーナの中で構築され消費されるのかを精緻に捉える必要性があることを指摘した．

第 1 章では，「空間の記憶」と「価値の消費」という 2 つの理論的視座を提示した．

産業遺産の観光資源化プロセスとは，複数の地理的なレイヤーの中で，言説的にも実践的にも進展するものである．そこは文化をめぐる「場／アリーナ」であり，複数の主体のせめぎ合いが生じる．また，産業遺産は「過去」の保存を目的とするものであり，関係する主体の時間認識によっても，最終的に見出される価値には差異が生じるはずである．こうしたせめぎ合いや差異を，産業遺産の価値構築の側面から捉えるために，本稿では「空間の記憶」の形成プロセスに着目した．また，そのプロセスは価値の再生産をも包含するが，それを捉えるために，「空間の記憶」の形成プロセスの中に「価値の消費」の次元を設定した．その上で，それぞれについて，集合的記憶論，空間／場所論，観光消費論，パフォーマンス論などを横断的に検討することで，理論的に精緻化させることを試みた．

「空間の記憶」とは，それぞれの主体の価値構築の準拠点となるものである．その価値の語りの権利をめぐって，関係する主体としての社会集団の間には境界が構築されることもある．ここで肝要なのは，社会集団，そして空間／場所を，変容可能性を持つものとして捉えることである．価値をめぐっての主体間の差異が，権力的な作用に直結しないためには，まずは集合的記憶の枠組みとしての記憶の環境に，広範な主体が共有できる象徴性が見出される必要がある．そして，空間／場所が開放され，そこにおいて布置された秩序を揺るがす「戦術」としての「日常的実践」の余地が生まれる必要があることを論じた．

そして，そこで構築される価値は，地域社会の主体と観光者との「意味の交換過程」に置かれる．この「価値の消費」の次元における論点は，価値と消費と再生産のプロセスにおいて，既往の秩序を強化するあるいは既往の秩序を揺るがす実践とは，それぞれにいかなる性質を持つのかというものである．その際に，観光者のパフォーマンスと，それが展開される「舞台」としての産業遺産の場が，どのような性質を持つのかを精緻に捉える必

要があることを論じた．それを具体的に考察するための道具的な概念が真正性である．特に，ホストとゲストの相互作用に基づく創発的真正性が構築されることが，既往の秩序を揺るがす実践として重要であることを示した．

第 2 章では，事例研究の予備考察として，現代における産業遺産の観光資源化の方法論が形成されてきた通時的なプロセスを，時々の社会的文脈と対応させながら整理した（第 1 の検討課題）．

その結果，1990 年代において，産業の遺構を「文化遺産として」観光資源化する方法論が形成されてきたことが明らかになった．この要因として第 1 に，「文化」に対する認識枠組みの変化がある．これは国家という資源化のアリーナの中でまず進展した．文化行政のレベルにおいて，産業が「歴史化」される中で，産業の遺構を文化的所産として捉える枠組みが構築され，それが地域社会に伝播していくことになった．しかし，地域社会においてはその意図とは別に，地域独自の文化的価値の構築と伝達が図られた．ここで，それぞれの主体の集合的記憶が準拠点として想起され，多層的な「空間の記憶」に基づく文化的価値の構築が図られたのである．そして第 2 の要因として，産業構造の転換に伴う地域経済の疲弊と，ヘリテージ・ツーリズムという新しい観光の形態の登場が挙げられる．国家，地方双方の行政レベルにおいて，経済政策と文化政策が接近し，産業の遺構は地域固有の資源として見出されるようになった．これを「文化遺産として」消費する，つまりその価値の受容や再生産を行う観光の形態が現れたことで，本研究で言うところの「価値の消費」の次元が成立することになった．こうした通時的なプロセスを経て，現代における産業遺産の観光資源化の方法論が成立したのである．

第 3 章では，住友赤平炭鉱跡と生野鉱山を中心とする産業遺産群の 2 つの事例を取り上げ，産業遺産の価値構築プロセスにおける地域社会の力学を，「空間の記憶」の次元から検討した（第 2 の検討課題）．

赤平の事例の特徴は，限定された主体による内発的かつ自発的な実践として，産業遺産の観光資源化と，それに伴う文化的価値の構築が進められた点にあった．資源化は，もっとも基層的な生活実践のレベルで生じ，国家や市場というアリーナの影響をあまり受けずに進展してきた．そして，明確なランドマークとしての立坑が中心的な記憶の環境として設定され，そこにおける象徴性は炭鉱労働や石炭産業に関わるものへと収斂されていった．

ここで重要なのは，決して立坑という空間／場所の象徴性が，広く共有されたものではなかったという点である．ただし，限定された主体が展開する実践として捉えられる限り，記憶の環境をめぐる象徴性の共有可能性の問題は，地域社会においてはほとんど可視化されなかった．一方で，記憶の環境としての立坑を開放し，そこに「日常的実践」を再構築しようとする動きも存在していた．

生野の事例の特徴は，明確なランドマークを有さず，鉱山・選鉱場の閉山・閉鎖から時

間を経てから産業遺産の観光資源化が開始されたために，資源化の対象が幅広く，それぞれの主体が独自の「空間の記憶」を形成し，そこに多様性，換言すればずれが確認できる点にあった．また，当初から観光資源としての活用が想定され，中央省庁による補助・助成や，学術調査の影響を受けたこともあって，生野の事例では国家，市場，生活実践の場という３つのレベルにおける資源化が相互作用しながら進展することになった．

しかし，地域社会の内部に目を向けると，こうした特性がすぐに「記憶の場」の構築や，地域住民の言説的・実践的排除に直結するわけではないことも分かった．むしろ，ナショナルな「空間の記憶」の形成をも，地域社会の主体は自らの戦略の中に取り込み，生活実践のレベルにおける産業遺産の観光資源化を進めていった．一方で，記憶の環境の象徴性については，それを共有可能なものにしていこうとする動きがあったわけではない．「空間の記憶」は，それぞれの主体の資源化の実践を規定するため，多様な主体がそれぞれの意図に基づき，それぞれの方法を用いて観光資源化を進めていくことになった．ただし，2000年代後半になって，記憶の環境の範囲が拡張され，住民の生活環境までもがそこに包含されるようになったことは，その後に広範な主体が「生活」という共通した象徴性を見出す素地になったと言える．

第４章では，産業遺産を「観光」資源として活用することで生じる特有の力学について考察した（第３の検討課題）．

赤平の場合，一方では立坑が明確な保存活用計画の下で管理されるようになり，産業遺産の観光資源化が進展することになった．しかし他方の帰結として，鉱員層を中心に，産業遺産の観光資源化に疑義を呈する態度が一気に可視化したことで，地域社会の内部にコンフリクトが生じることにもなった．炭鉱労働の最前線にいた彼らは，現在の「遺産」となった立坑に物質的真正性を見出さず，また「開発」言説として観光を捉えるため，立坑を中心とする産業遺産の観光資源化を肯定的に捉えることがない．こうした思考態度や言説が強固な社会集団の中で再生産され，さらに彼らは観光者とのコンタクトを含む「価値の消費」の場に立ち会わないため，産業遺産の観光資源化のアリーナから遠ざかることになる．

このように，産業遺産の観光資源化が地域社会全体の課題として提示されると，空間／場所の象徴性の共有可能性をめぐる問題が立ち現れることになることが明らかになった．さらに，産業遺産の観光資源化のアリーナに，国家や市場というレベルを設定させようとすること，特に，立坑という空間／場所を経済的価値の交換過程に置き，商品化を図ろうとする動きに対して抵抗が生じることになった．こうした状況は，赤平市における炭鉱操業時からの地域構造の連続性に起因している．これは，ローカルな場における政治的，社会的文脈の中に主体を位置づけて，そこにおける力学に注意を払う必要性を示すと同時に，観光資源化に伴う社会的排除という課題も投げかけることになる．

一方で，生野の事例では，こうしたコンフリクトや排除の問題は顕在化していない．それを考える鍵が，もともとの対象の多様性に加えて，主体としての＜愛好家＞の実践と，「価値の消費」と「空間の記憶」の形成の相互作用である．＜愛好家＞は価値としての「歴史」を伝達するのではなく，地域住民や来訪者が自由にその場を「感じられる余地」を作り出そうとする．ここでは真正性はあらかじめ明示された客観的要素ではなく，産業遺産という空間／場所において動的に形成，体感されるものである．ここで，観光者と地域住民との直接的なコンタクトが生じると，そこに創発的真正性が構築され，明文化されづらい，あるいは公的な価値として認められづらい言説を掘り起こすことにもなる．さらに，これは学術的な知見に基づかないがゆえに，そこにおける「価値の序列化」の発生を妨げることが可能になる．

このように,「価値の消費」の次元における創発的真正性の構築は，価値の序列化を回避することにつながり，それはさまざまな主体の「空間の記憶」を保証することを意味する．それにより，地域住民の伝達する価値やその実践そのものの序列化も妨げることができるため，多様な主体を言説的にも実践的にも，産業遺産の保存と観光資源化のアリーナへと包摂する契機となりうるのである．

第 5 章では，以上の知見を踏まえた上で，本稿の根本的な問題意識に立ち返り，産業遺産の観光資源化プロセスにおける，広範な主体の言説的・実践的な社会的包摂の可能性について検討した．その結果，生野ルートダルジャン芸術祭や，住友赤平炭鉱跡における坑口浴場の保存などについての事例研究を通して，以下の 2 つの示唆を得ることができた．第 1 に，広範な主体が共有できるところの空間／場所の象徴性とは，限定性のある「労働」ではなく，地域社会内部のさまざまな層が直接的な経験を有する「生活」の方にあると言える．第 2 に，こうした想起の行為が成立するためには，空間／場所を開放することが必要である．つまり，そこが物理的にも認識的にも多くの主体に開かれた記憶の環境となる必要がある．観光とアートという手段は，こうした空間／場所の開放圧力として作用する．加えて，それによって明文化された文化的価値が後景に退き，それぞれの主体による「体感」を可能にすることで，そこに現代における「日常的実践」が生まれる余地を作り，創発的真正性が構築される契機ともなる．こうした形で産業遺産の文化的価値の多様性が担保されることは，その価値構築をめぐっての社会的排除の問題を乗り越えることにもつながっていくのである．

終章ではこれらの議論を総括した上で，本稿の成果として以下の 4 点を提示した．第 1 に，地域社会の内部において，産業遺産の観光資源化をめぐっての言説的，実践的な多様性が認められることを明らかにした点である．これは，固定的な地理的レイヤーや，特定の階層が,文化遺産の権力性に対抗的な役割を持てるとする知見に再検討を促す.第 2 に，観光の持つ多面性を実証的に示した点である．観光の「偶発性」「事後性」が重要であると

する知見は，既往の文化／環境社会学の成果に再検討を促すことになる．第 3 に，社会的排除／包摂という課題に対して，実践的な示唆として「生活」という象徴性が重要であることを明らかにした点である．そして第 4 に,「空間の記憶」と「価値の消費」という理論的視座の一般性がある．一方で，本稿の課題として，これら知見をグローバルな現象の中に位置づけること，また観光者個々の言説や相互作用に言及することなどを挙げ，最後に今後における研究課題についても言及した．